洞性頻脈に対する
植込み型除細動器（ICD）の
6回目のショック作動が心室頻拍
（VT）を誘発して低酸素脳症を
生じた1症例

小村 悟 池主雅臣 佐藤光希
岡田輝輔 和泉大輔 岡村和気
山下文男 田辺靖貴 古崎博司
相澤義房

抄録
症例は76歳、女性。1995年、陳旧性心筋梗塞後（左
室駆出率：23%）の心室頻拍（VT）に対して植込み型
除細動器（ICD）治療を行った。その後、数年に1回の
適切作動を認めたが、不適切作動は認めていなかった。
2004年、自転車運転中にICDが作動し、降りたところ
で意識消失した。救急隊到着時、呼吸停止。モニター
上心室細動（VF）を認め体外除細動後に搬送された。
ICD記録では、洞性頻脈（心拍数：141/分）に対して抗
頻拍ペーシング（治療①）ショック通電（治療②，③）が
行われ、その後の治療④のショックがVT（心拍数
195/分）を誘発した。治療⑤のショック通電でVTは
いったん停止したが、継続する洞性頻脈に治療⑥の
ショック通電が行われ、再度VTが誘発されて以後VF
に移行した。ICD治療例では経過中の同頻拍レートの
上昇が致命的なICD不適切作動を生じる危険があり注
意を要する。